

ASUBHAKAMMATTHĀNA

タイ・テーラワーダ仏教の不浄観

やがてこの身も遠からず……

Wat Phraputtabat – tamo

Chiangmai Thailand

不浄観の修習は仏教修行者にとってきわめて意義のある実践として初期仏教の時代から行われていて、北伝の大乗仏教、南伝のテーラワーダ仏教、それぞれに理論の形成と伝承の歴史を持っている。

日本をふくめた大乗仏教の国々で、不浄観の修習がどのように為されているか知る機会がないのだが、テーラワーダ仏教の国では現在でも修行法としてのはっきりした位置づけが為されている。

それは、自他の身体への執着から離れることによる深い禅定をめざし、さらにそれをゆるぎない覚醒に導こうとするものであり、きわめて具体的、即物的な方法がとられる。

チョンブリー県の、小さな島にある寺院の裏庭の立ち木の間には犬の死骸が左右から紐で引っ張るようにして晒^{さら}されていた。犬はすでにひどく腐乱していて周囲にもものすごい悪臭を放っている。これを観法の対象にするわけだが、この寺院には女性のミイラが置かれている小部屋もあって、ここでも不浄観の修習が行われる。

なにもそこまで、と思うのは普通の感覚であって、修行が先鋭化されてゆく過程ではむしろ必然性をおびてくるように思える。

* バンコックの警察病院にある遺体解剖室に入る際、比丘(僧侶)はまったくのフリーパスで、受付に声をかける必要すらなく直接部屋にはいることが許されている。

ここでは死因の判らないもの、事故死のものなどが法医学解剖されるわけで、部屋の中には昨日搬入されたばかりの遺体が十体以上あり、入りきれない二、三体は中庭に置かれていて、すでに紫色に変色したそれには無数のハエがたかっている。壁には特大の換気扇が取り付けられてあり、それで中の空気を外に吐き出しているのだが、際限無く発生している死臭ははっきりと「記憶に残る臭気」となって部屋の中にいつまでも漂い続けている。

* 主に不審死の法医学解剖を行っていることもあり、現在では比丘が止住する寺院からの見学要請の書類が求められる。

いちばん端の解剖台では二人がかりで遺体を裏返しにしている。すでに体が硬直しているため、それほど力をかけなくても簡単にうつ伏せの状態にすることができる。それはまるで、道端に放置されていた丸太を片付けてでもいるような、ひどくあっさりとした何でもない作業のように見えた。

仏教、特に初期仏教においては死が重要なテーマになっていて、パリー經典の中の「バンマパダ」や「スッタニパータ」には死そのものを直視する詩句が数多くあるのだが、その中のひとつに奇妙なというか不可解な詩がある。

ああ、この身はまもなく地上によこたわるであろう。
—— 意識を失い、無用の木片のように投げ捨てられて。

ダンマパダ(四十一)中村 元訳

ダンマパダの注釈書によると、この詩は病魔におそわれて瀕死状態にあるプーティガッタ・ディサ長老(腐った体のディサ長老)を見舞いに訪れたブツダが、その全身に腫れ物のできた体を温水で洗い清め、染め直した衣を着せてベッドに寝かせた枕もとで唱えたことになっている。

それにしても、死にかかっている病人の枕もとで「この者は間もなく死んで、使い道のない丸太のように捨てられる」などと生の断崖から突き落とすようなことを言う者がいるだろうか。しかし、そこはさすがにブツダの弟子で、ディサ長老はこの詩を聞いたとたんに最終的な覚醒を得て、間もなくパリニッバーナに入ったとされている。

注釈書によっては看護の結果、健康を回復し修行に励んだ後に—— となっているものもあるのだが、誰もが見たくなく考えたくない事実を、つまり確実に死んでしまう事を、瀕死の状態にあってなお直視することを要求する師は、この弟子の力量をはっきり洞察していたのだろうし、弟子はまさしくこの最終的な覚醒のために不浄観や死念の修行を重ねて来た、と言える。

詩の不可解さはディサ長老の、全身を膿^{うみ}だらけにして「腐った体」などと嘲笑されてもなお修行に励んでいる状況が知らされていないことにもよるが、それよりも、むしろ読み手の側に「自分もまた、遠からず無用の丸太のようなものになってしまう」ことなど想像したくないといったものがあって、それがこの詩に異質な印象を持たせているのかもしれない。

「この身」とは、誰かの身体のことではなく、遠からずその存在する意味の確実に失せてゆく自分の身体に他ならない。

解剖台の上に置かれた死体をいくら見つめても、死そのものが見えるわけではない。

しかし、そこにある「もの」は単なる物質になるまでにはまだ時間がかかりそうでもあるし、そもそも物質が腹を引き裂いてここまで露骨にその内実を晒^{さら}してしまうことはめったにないことで、だから解剖中の遺体は、何かずいぶんと中途半端な状態に置かれた「もの」のように見える。

死んでしまった肉体は生きることも死ぬこともできず、生きてきたことの残滓^{ざんし}はその体から急速に消え去ってゆき、男女の性別や年齢といった大まかな特徴だけが残される。

少年、大人、女、痩せた老人、立派な体格をした中年の男。それぞれが首の付け根から下腹部まで切り開かれ、あるいは頭皮をめくられたあと、簡単に縫合されて隣の部屋に集められる。

たとえ十歳の少年であっても生きてきたことの物語があるように、無造作に並べられた人たちにもそれぞれに語り尽くせないものがあるはずなのに、今はもうただそこのあるだけで自分を表現する術がなく、どれもこれも「単なる遺体」でしかなくなっている。

部屋の中に入る前は、むごたらしいものを見せられて気分が悪くなるだろうと思っていたのだが、入ってしばらくすると、むしろ心が少しずつ静まってゆくのが感じられた。

たとえば冬の朝。

普段とちがう静けさに目を覚まし、窓から外を見ると知らぬ間に雪がつもっていた時の、あの自分だけが世界から取り残されたようなある種の寂寥感と、しかし、それでいて実はここがもともと自分のいた世界のように思える安堵感が、遺体を前にした私の心に静けさをもたらしたのかも知れない。

警察病院の正面玄関から外に出る頃には陽もかなり高くなっていて、その時刻のバンコクの街には朝の喧騒の去った、明るく、それでいて多少虚無的な静けさが訪れる。

私はバスの片すみの座席に座り、車窓から道行く人々を眺めている。行商に行く女の人たちのくったくのない笑顔。杖をついてゆっくり歩く老人。オートバイの若者。

その時の私は、普段あまり経験することのない種類の気持の落ち着き、そして、生きてゆくことの勇気のようなものが心に満ちているのを感じていた。

死は、死体にではなく、生きている者において表され、その生を内側から明るく照らしだしているのだろうか……………。

Phra Takashi (Ochiai) Mahāpunnyō (落合 隆)